

# 上田耕甫《時代盆踊図》

豊田 郁

本稿では、大正六年（一九一七）に制作された上田耕甫《時代盆踊図》

〔図1〕（関西大学図書館蔵）を紹介する。絹本着色で、縦一一〇、七、横四二、一センチメートルの作品である。画面上部は余白で、下部に五人の男女が踊る様子が描かれた。それぞれの人物は異なる方向を向いて



図1 上田耕甫《時代盆踊図》、大正六年（1917）制作

おり、衣装や髪型はそれぞれ特徴的であるが、組合せの妙により、調和した構図となっている。少々肥瘦のある細く軟らかい線描は、上品で優美な印象を感じさせる。静止したような美しさの特徴とする耕甫の描写だと考えられる。彩色は鮮やかで人物の衣装に青系統の色を用い、手拭や着物の文様に赤を用いてバランスをとっており、洗練されている。

近代大阪で活躍した写生派・円山派の画家で、大阪の旦那衆に愛顧され「船場の画家」とも呼ばれた上田耕甫（一八六〇—一九四四）は現在ではその名を聞く機会は少ない。耕甫は、大坂四条派の画家上田耕沖の

長子として万延元年（一八六〇）大坂に生まれ、昭和十九年（一九四四）二月一三日、八五歳で没した。名を長、字を頼道、号を耕甫という。父耕冲から自然写生を継承し、温雅な情感のこもった作風がみられる一方で、濃厚な色彩で彩られた静止したような直線的な美しさを醸し出す作品を描いたとされる。

耕甫に関する研究は少なく、平成六年（一九九四）には池田市立歴史民俗資料館が、上田三代の活躍をとおして、池田と大阪の結びつきを見直すという目的で、「日本画家 上田耕夫・耕冲・耕甫」展を開催し、この図録<sup>①</sup>によると、耕甫は、院展・文展・帝展といった大きな展覧会を機軸にするのではなく、特定の有力な後援者との関係の中で活躍したとされる。その背景には、近代の大阪が、経済的にも文化的にもその最盛期にあり、住友や藤田といった経済人らの後援が得られ、また、船場を中心に後援者と画家たちとを結ぶ特殊なシステムが整えられていた環境があったようである。耕甫の作品の中には、表具師三代目井口藤兵衛（邨僊）の手による表具も少なくなかったと推測されている。井口は住友家や藤田家出入りの傑出した表具師として知られた人物で、コーディネーターとしての役割をも果たしていたようである。

耕甫も、住友家第十五代吉左衛門（春翠）との交流は密であったらしく、春翠の長女孝の日本画の教授にあたった。住友家と耕甫の結びつきがどの時点で求められるかは明確ではなく、耕甫の名が、春翠の生涯を詳述した『住友春翠』（芳泉会、一九七五年）に初めて記載された明治四三年（一九一〇）は、耕甫は五一歳であったため、力量によって住友家に認められ関係が生じたと指摘されている。『住友春翠』には、耕甫に関

する記述が六箇所見出されており、その記述によると席画も行ったとされる。席画を介した後援者との結びつきは、大阪独特の形であったようである。また、春翠の好みは典雅で清楚な趣をたたえ、抑制のきいたほどよい装飾性をもった作品が多いとされ、耕甫の作風と一致したのであろう。

箱書（蓋表）には「時代盆踊図」と墨書される「図2」。《時代盆踊図》の画面右下の落款には、「大正丁巳初秋耕甫」と墨書「図3」されており、大正六年（一九一七）初秋に描かれたことが判明する。続いて「上田長印」の白文方印「図4」および「耕甫」の朱文方印「図5」が捺されている。落款の墨書は、細く軟らかい筆跡で、画業前期の太く丸みのある墨書と比較すると、洗練された後年の墨書となっている。

縦長の掛幅による画面には、上部に余白が大きく残されており、中央から下部に、踊りに興じる五人の人物が着色で描かれている。まず、一人目の人物「図6」は紫帽子に鼈甲の櫛を差し、笹模様の着物を着ている。紫帽子を被っていることから、この人物は女形の歌舞伎役者であると推測される。次に、二人目の人物「図7」は赤い手拭を巻いており、露芝文に「波」「之」「志」「踊」「計」などの文字文が描かれた着物に、金と黒の縞文様の帯を締めている。三人目の男性「図8」は、編笠を被っており、目が隠れている。市松文に将棋の駒が描かれた遊びのある着物を着ており、右肩に刀を載せ、左手で金色の閉じた扇子を持ち、少々傾いた姿勢のため、袖に描かれた「王将」「金将」が映えている。加えて、四人目の男性「図9」は、日に焼けた濃い肌の色、がっしりとした体格、腕や腿、脛の体毛の描写が他の四人の人物と異なり、横姿で相撲



图4 印章



图5 印章

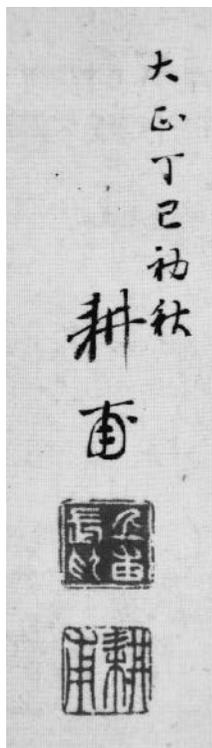


图3 落款



图2 箱蓋(表)



图7 《時代盆踊图》(部分)



图6 《時代盆踊图》(部分)



図9 《時代盆踊図》(部分)



図8 《時代盆踊図》(部分)



図10 《時代盆踊図》(部分)

を取るような姿勢である。最後に、五人目の女性「図10」は後姿で描かれており、すじ笄髷を結び、流水に散り紅葉という龍田川文をふまえた文様の着物に金色で蕙文が描かれた帯を締め、金地に墨竹の扇子を広げている。この女性の髪形、着物の文様は、安永八年（一七七九）に出版された『当世かもじ雛形』に見られる髪型、衣装と類似しており、耕甫が参照した可能性が指摘できる。

画面構成を見ると、中央より少々下に一人目の人物が配置され、一人目の人物と対になるように画面中央より左に二人目の人物が描かれている。これらの人物は白い肌に目の周辺を桃色に彩色しており、唇の赤色が際立っている。対照的に、三人目の人物は鼻と口のみ、四人目の人物は眉と目だけが描かれ、顔の全貌が見えず、画面中央より右に配置されている。五人目の人物は後姿で、三、四人目の人物と対になり、画面中央より左に配されている。人物の体の向きが異なるだけではなく、正面、横姿、後姿を描いており、人物の姿勢とその組合せに非常に気を配っているといえよう。そのため、『時代盆踊図』は緻密に計算された印象を与える。

この緻密な性質は彩色においても指摘できる。まず、青系統の色を五人の人物のそれぞれの衣装に用

いているほか、二人目の着物の「之」という字と五人目の着物の帯は同じ色を用いている。また、二人目の着物の輪郭線は銀色を用い、金色の文字文と調和させている。金色で彩色された部分、刀の柄や扇子、文字文には、朱色の上から塗り直した跡が見られ、一人目、四人目、五人目の着物には彩色の上から金の描線で縁取りがされている。このことから、朱色から金色へ彩色を変更し、人物の着物や持物に金の描線で縁取りをして、全体の色調を整えたと考えられる。青、赤、緑と、金、銀の調和により、典雅な装飾性をたたえている。

『画題辞典』（斎藤隆三、一九二五年）によると、盆踊は江戸時代に特



図11 鈴木其一《群舞図》、江戸時代

に盛んに行われ、元禄頃に絶頂にあつたとされ、時流風俗として風俗画家が多く描いたという。伝菱川師宣、英一蝶、岩佐又兵衛のほか、富岡鉄斎にも《盆踊図》がある。そのなかで、耕甫による《時代盆踊図》に似たものとして、鈴木其一《群舞図》（江戸時代・一九世紀）「図11」がある。《群舞図》は、絹本着色で縦一〇六、〇、横四九、五センチメートルの作品で、寛永年間（一六二四―四四）に描かれた風俗画を学び、翻案した作品とされる。「体を折り曲げて踊り、重なり合った五人は、袖や体の曲線の動きも響き合って左右に律動する構図となっている。其一は、享楽における艶姿を描こうとしたのではなく、人々の着物の紋様と色面構

成によって、抽象化された形態に興味を注いでいる」と指摘されており、耕甫による《時代盆踊図》と共通する造形要素を持つといえよう。また、《群舞図》の一番奥の人物が手に持つ団扇には、光琳画らしき墨竹図が認められるが、この図様は《時代盆踊図》の五人目の人物が持つ扇子と類似する。

《群舞図》と比較すると、《時代盆踊図》の特徴として、色彩の明度が高いこと、より抑制された動きであること、上部の余白が広いことが指摘できる。これらは、耕甫の作品、《四季花鳥図屏風》（昭和五年）や《八橋図屏風》（制作年不明）が、琳派の伝統に倣いながら、余白の強調と動きを抑制した直線的な描写により、静けさを強く感じさせるといった特質に通じていよう。耕甫は、余白の広い構図により、鮮やかな色彩と整った形そのものを際立て、静かな美を表現したと考えられる。《時代盆踊図》は、緻密に計算された構図と彩色、余白を広くとっている点で、耕甫の造形の一面が理解できる作品である。加えて、抑制された動きで踊りに興じる人物たちは濃厚な色彩で彩られた衣装を纏っており、耕甫の特徴である静かな美しさと典雅な装飾性がよく現れている作品であるといえよう。

## 注

- ① 『日本画家 上田耕夫・耕冲・耕甫』、池田市立歴史民俗資料館、平成六年（一九九四）。
- ② 図11は注③『プライスコレクション 若冲と江戸絵画』展図録掲載の作

品であるが、この群舞図と図柄を同じくする其一画が存在することが知られ、人物の輪郭線にやや神経質なところが認められるので、この作品を其一その人のものとみなすことを躊躇する見解もある。

- ③ 『プライスコレクション 若冲と江戸絵画』、東京国立博物館、日本経済新聞社編集、日本経済新聞社発行、平成一八年（二〇〇六）年。

## 挿図出典

- 図1～10 いずれも関西大学図書館所蔵。
- 図11 『プライスコレクション 若冲と江戸絵画』、東京国立博物館、日本経済新聞社編集、日本経済新聞社発行、平成一八年（二〇〇六）年。